

塚合古墳群Ⅱ

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

本庄市教育委員会

塚合古墳群Ⅱ

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

本庄市教育委員会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一
生誕の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持
つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至
るまでのさまざまな遺跡が分布しています。とくに古墳時代の遺跡は、埼玉県重要
遺跡に選定されている旭・小島古墳群をはじめ、大久保山古墳群、生野山古墳群な
どが所在し、数多くの古墳が集中する地域として県内外から注目されています。

本書は本庄市日の出2丁目に所在する塚合古墳群の発掘調査成果を記録したもの
です。今回の発掘では、小規模な調査範囲であったにもかかわらず、3基の古墳の
周溝が確認されました。このように古墳が密集して造られた様子は「百八塚」と称
された塚合古墳群のかつての景観を彷彿とさせるものです。また、調査では円筒埴
輪や形象埴輪も出土し、古墳の年代を解明するうえで重要な資料を得ることができ
ました。

貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与
えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛か
りとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の
場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保
護に対する深いご理解を賜りました阪上松生氏をはじめ、調査に際してご指導、ご
協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に衷心よりの感謝を申し上
げます。

平成 21 年 3 月

本庄市教育委員会

教育長 茂 木 孝 彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市日の出二丁目 3490-1 に所在する塚合古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は、阪上松生氏が計画する共同宅地の新築工事に伴い、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査及び、整理・報告は、平成 20 年度塚合古墳群発掘調査受託事業として実施した。
4. 発掘調査は、塚合古墳群の内、約 225 m²を対象として実施した。
5. 発掘調査の期間は以下の通りである。
自 平成 20 年 7 月 17 日
至 平成 20 年 7 月 31 日
6. 発掘調査担当者は、本庄市教育委員会文化財保護課 太田博之・大熊季広があたり、発掘調査には有限会社毛野考古学研究所宮本久子が調査員として専従した。
7. 発掘調査に関する発掘基準点測量、遺構等の測量は有限会社協同測地開発に委託して実施した。
8. 整理期間は以下の通りである。
自 平成 20 年 8 月 1 日
至 平成 21 年 3 月 19 日
9. 整理及び報告書刊行にかかる業務は有限会社毛野考古学研究所に委託し、整理及び報告書刊行にかかる業務は、宮本が担当した。
10. 本書の執筆は、I を本庄市教育委員会文化財保護課が、その他を宮本が担当した。
11. 本書の編集は、本庄市教育委員会文化財保護課の指導に基づき、宮本が担当した。
12. 本書に掲載した出土遺物、遺構及び遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関連する資料は本庄市教育委員会が保管している。
13. 発掘調査から整理調査、報告書刊行に至るまで、以下の方々からご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。(順不同・敬称略)
金子彰男、坂本和俊、外尾常人、田村 誠、長滝歳康、丸山 修、矢内 勲、有限会社協同測地
14. 本報告書の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に係る本庄市教育委員会の組織は以下の通りである。

教 育 長 茂木孝彦

<本庄市教育委員会事務局>

事 務 局 長 丸山 茂

文化財保護課

課 長 儘田英夫

課 長 補 佐 鈴木徳雄

埋蔵文化財係

係 長 太田博之

主査 恋河内昭彦 主任 大熊季広 主任 松澤浩一 主事 松本 完

臨時職員 的野善行

凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標IX系に基づく。各遺構図における方位針は座標北をさす。
2. 本調査において、古墳址はS Tと称する。
3. 本書に掲載している遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

【遺構図】

調査区全体図… 1/100 S T平面図… 1/120 S T断面図… 1/40

【遺物実測図・拓影図】

埴輪・土師器… 1/3

4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示し、54.400 mに統一している。
5. 遺構断面図のスクリーントーンは地山のローム層を示す。
6. 本調査における遺構の土層断面及び遺物観察表に示した色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。
7. 本書で使用した地形図は国土地理院発行 1/25,000「本庄」に加筆したものである。
8. 本書で使用した位置図は本庄市発行「本庄市都市計画図 12」1/2,500に加筆したものである。
9. 本書で使用した、参謀本部陸軍部測量局作成の迅速図は『本庄市史』通史編Ⅲの付図2に加筆したものである。
10. 本書の参考文献は巻末に一括して記載した。

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次

挿図目次
挿表目次
写真図版目次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の環境	
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
3	塚合古墳群の概要	5
III	調査の方法と経過	
1	調査の方法	7
2	調査の経過	7
IV	調査の成果	
1	基本層序	9
2	検出された遺構と遺物	9
3	遺構外出土遺物	14
V	まとめ	16

写真図版

報告書抄録
奥付

挿図目次

図1	埼玉県の地形	2	図8	ST-1出土遺物	11
図2	塚合古墳群の位置と周辺の遺跡	4	図9	ST-2平面および周堀土層断面	12
図3	調査地点	6	図10	ST-2出土遺物	13
図4	明治18年迅速図	6	図11	ST-3平面および周堀土層断面	14
図5	調査区全体図 (S=1/100)	8	図12	ST-3出土遺物	14
図6	基本層序	9	図13	遺構外出土遺物	15
図7	ST-1平面および周堀土層断面	10	図14	塚合古墳群の復元	17

挿表目次

表1	ST-1出土遺物観察表(1)	11	表4	ST-3出土遺物観察表	14
表2	ST-1出土遺物観察表(2)	12	表5	遺構外出土遺物観察表	15
表3	ST-2出土遺物観察表	13			

写真図版目次

写真図版1	ST-1全景 北から ST-1全景 東から ST-1墳丘残存状況	写真図版3	ST-2全景 西から ST-2土層断面 ST-3全景
写真図版2	ST-1土層断面 ST-1礫出土状況 ST-1馬歯出土状況	写真図版4	ST-1出土遺物
		写真図版5	ST-2・3出土遺物
		写真図版6	遺構外出土遺物

I 調査に至る経過

平成 20 年 2 月 21 日、阪上松生氏から埼玉県本庄市日の出二丁目 3490-1 の一部において共同住宅の新築工事の計画があり、開発予定地内における埋蔵文化財の所在とその取り扱いについての照会文書が本庄市教育委員会に提出された。

本庄市教育委員会が埼玉県教育委員会発行の埼玉県遺跡地図（平成 19 年度版）をもとに同地の埋蔵文化財の有無を調査したところ、当該計画予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である塚古墳群（県遺跡番号 53-176）の範囲内に位置していることが判明した。そこで本庄市教育委員会で平成 20 年 4 月 14 日～4 月 15 日の日程で試掘調査を実施したところ、開発予定地内には古墳の周溝などの埋蔵文化財が包蔵されていることを確認した。

この結果を受けて、平成 20 年 4 月 17 日付け本教文保発第 23 号『埋蔵文化財の所在およびその取り扱いについて』にて、本庄市教育委員会は事業主体者に以下のように回答を行った。

- (1) 開発予定地は試掘調査の結果、埋蔵文化財が存在することが判明しており、現状保存が望ましいこと
- (2) 事業計画上やむを得ず現状を変更する場合には市教育委員会と事前に協議すること
- (3) 埋蔵文化財包蔵地内で工事を実施する場合には、文化財保護法第 93 条第 1 項の規定により『埋蔵文化財発掘届』を埼玉県教育委員会宛に提出するとともに、その指示に従い埋蔵文化財の保存に万全を期すこと

その後、事業主体者と本庄市教育委員会との間で計画変更等の協議を行ったが、他に共同住宅建設の適地がなく、事業計画上、開発予定地の埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達し、やむを得ず、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

記録保存のための法的手続きとしては、事業主体者より平成 20 年 7 月 14 日に文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく『埋蔵文化財発掘届』が本庄市教育委員会に提出され、本庄市教育委員会は平成 20 年 7 月 15 日付け本教文保発第 107 号にて「試掘調査の結果などから現状保存が困難なため、記録保存のための発掘調査が必要と考えられる」旨の副申を添えて、同届を埼玉県教育委員会に進達した。これに対して埼玉県教育委員会から、平成 20 年 9 月 14 日付け教生文第 5 - 520 号の通知文書『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』にて、土木工事着工前の発掘調査実施が事業主体者に指示された。

発掘調査は本庄市教育委員会が調査主体者となり文化財保護法第 99 条に基づいて実施し、同条および埼玉県埋蔵文化財事務処理要綱第 15 条に基づく『埋蔵文化財発掘調査の通知について』は平成 20 年 8 月 29 日付け本教文保発第 111 号にて埼玉県教育委員会に提出した。

現地における記録保存のための発掘調査は、平成 20 年 7 月 17 日～7 月 31 日の日程で実施した。

(本庄市教育委員会事務局)

II 遺跡の環境

1 地理的環境

塚合古墳群の所在する本庄市は、関東平野の北西部、利根川中流域右岸に位置する中核都市である。周辺の地形は大きく3つに分かれており、北が低地、南が台地と丘陵地となっている。

低地部は、利根川と台地に挟まれた部分で、烏川・神流川・利根川の氾濫によって形成された肥沃な沖積地である。「本庄低地」ないしは「妻沼低地」と呼称されている。

台地部は「本庄台地」と呼ばれ、神流川右岸の扇状地面に位置し、その末端は烏川の浸食を受け段丘崖を成している。この段丘崖が前述した低地との境界となり、高低差は4～12mとなっている。台地部東側には小山川や女堀川が低地に向けて流下し、河岸段丘が形成される。近年、発掘調査によって埋没河川が検出され、これによって形成された自然堤防が微高地として残存している。

丘陵部は、本庄市の南端にある独立丘陵であり、「大久保山」や「浅見山丘陵」と呼称される。沖積世末期以前には存在し、神流川扇状地が形成される過程の浸食作用によりできた残丘土である。

これらの地形の中で、塚合古墳群は本庄台地上、宅地化の進む市街地に立地しており、蛭川と女堀川に挟まれたところに立地している。

2 歴史的環境

塚合古墳群周辺には、遺跡が数多く存在している。特に、古墳時代について、周辺の遺跡を概観していきたい。古墳時代の遺跡は、集落・古墳群・埴輪窯跡に分類できる。

集落は、古墳時代から奈良・平安時代にかけてみられるが、古墳時代前期の段階では少ない傾向に

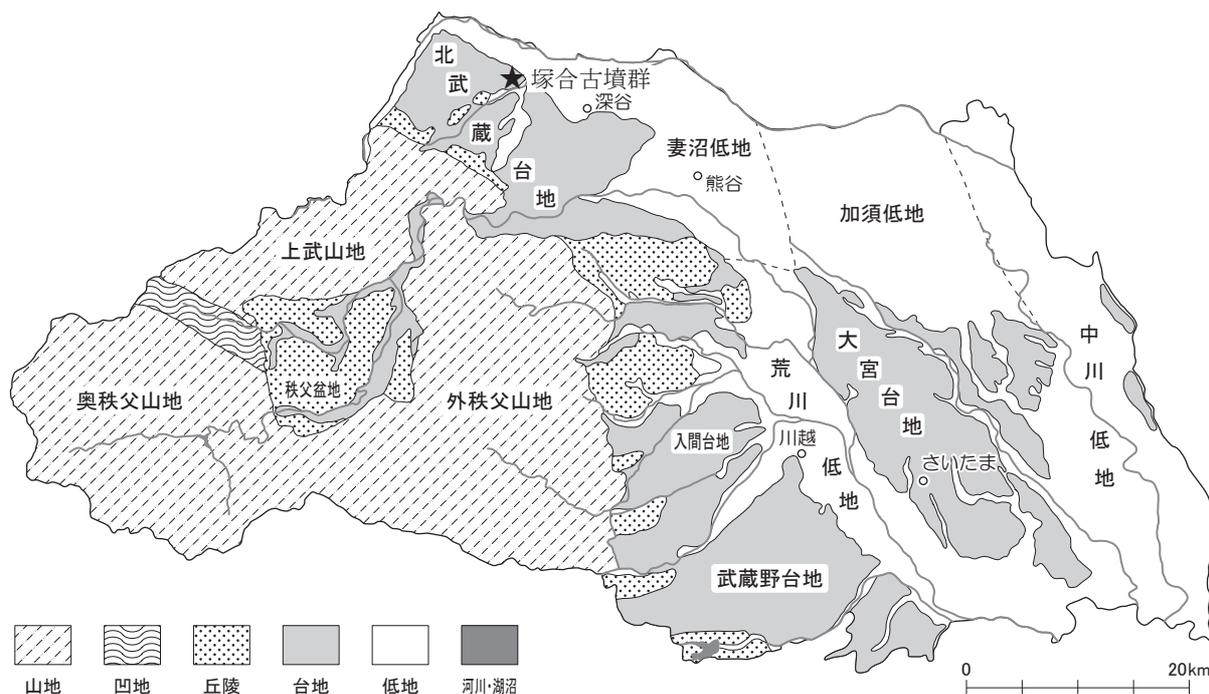


図1 埼玉県の地形

ある。社具路遺跡や小島本伝遺跡に住居跡が点在する。いずれの遺跡も台地の上の河川跡に沿った微高地に立地している。

中期以降、集落が台地の縁辺に沿って展開し始め、竪穴住居跡は増加する。薬師堂遺跡(1)、御堂坂遺跡(2)、諏訪新田遺跡(3)などがある。なお、五十子城跡遺跡(4)の10号住居跡からは、土器とともに石製品(石製模造品・勾玉・管玉・臼玉・砥石)・鉄製品(鉄斧・鉄鋏・鎌など)が出土しており、特筆される遺構である。このほかにも、前期集落の立地していた台地上の微高地には、カマド導入期の竪穴住居跡から布留式甕系の土器が出土した雌濠遺跡(20)や笠ヶ谷戸遺跡(19)、久下東遺跡(17)、七色塚遺跡(16)など中期から後期にかけて継続して集落が営まれている。

集落遺跡の間を縫うように古墳は展開している。最古の古墳は、本遺跡より南西に約3.5kmに位置する鷲山古墳である。確認調査の結果、竪穴系主体部を有する前方後方墳であることが判明している。遺物から前期末(4世紀後半)に比定され、埼玉県内においても最古の古墳とされている。

浅見山丘陵に所在する前山1号墳(14)がこれに続いている。前山1号墳は、時期等は不明であるが、前方後円墳と考えられ、その立地から前山2号墳に先行すると推測される。前山2号墳(15)は当初円墳と考えられていたが、調査の結果、粘土郭を主体部とする一辺約25mの方墳であることが報告されている。主体部からは、鉄製農具(刀子・直刃鎌・錘・鉋)や鉄剣が出土している。副葬品に石製模造品を含まないこと、直刃鎌の年代から、この古墳は中期前半(5世紀前半)とされている。前山2号墳とほぼ同時期、本庄台地において、旭・小島古墳群(A)の造営が開始される。万年寺つつじ山古墳や万年寺10号墳は、前述の前山2号墳と同様に方墳である。

中期中葉では、首長墓と考えられる大・中型円墳が築造される。塚合古墳群周辺では、径約65mを測る公卿塚古墳(18)が挙げられる。大正時代に既に破壊されたが、当時の記録が残っている。これによると墳頂部より約20cmで石製模造品が出土したとされ、竪穴系の主体部だったと思われる。このほか、土師器の壺、寸胴の器形で突帯下にヨコハケや格子目のタタキ技法を有する円筒埴輪が出土している。格子目タタキ技法の使用から、渡来系工人の移入も指摘されている。

この後、中期後半から終末期にかけて、本庄台地周辺には多くの古墳群が展開していく。北原古墳群(B)、御堂坂古墳群(D)、塚合古墳群(C)、鶴森古墳群(E)、東五十子古墳群(F)、西五十子古墳群(G)、浅見山古墳群(I)などが見られる。これらの古墳群は円墳が主であるが、東五十子古墳群には帆立貝形古墳が1基、今回調査した塚合古墳群には、前方後円墳が1基ある。ただし、前述した旭・小島古墳群では、前方後円墳1基・帆立貝形古墳が2基あり、他の古墳群より大規模なものとなっている。これらの古墳群は、終末期まで造営され続ける。

周辺では、埴輪窯跡が2箇所確認されている。赤坂埴輪窯跡(5)は、工事の際に焼土と大型の馬形埴輪と家形埴輪が出土しており、窯跡と考えられている。出土した家形埴輪片から年代は6世紀後半とされる。近接する東五十子北町中遺跡(7)からは、粘土採掘坑が多数検出されており、埴輪生産に用いられた可能性が考えられる。宥勝寺裏埴輪窯跡(13)では、調査により3基の埴輪窯が発見されている。円筒埴輪・家形埴輪・人物・馬形埴輪などの破片が出土している。円筒埴輪の底部が小さく、2次調整を欠き、なおかつ突帯の底平化が進んでいることから、6世紀後半に位置づけられている。これは、前述した赤坂埴輪窯跡と同時期となるため、操業期間や埴輪供給圏との関係について注目されている。

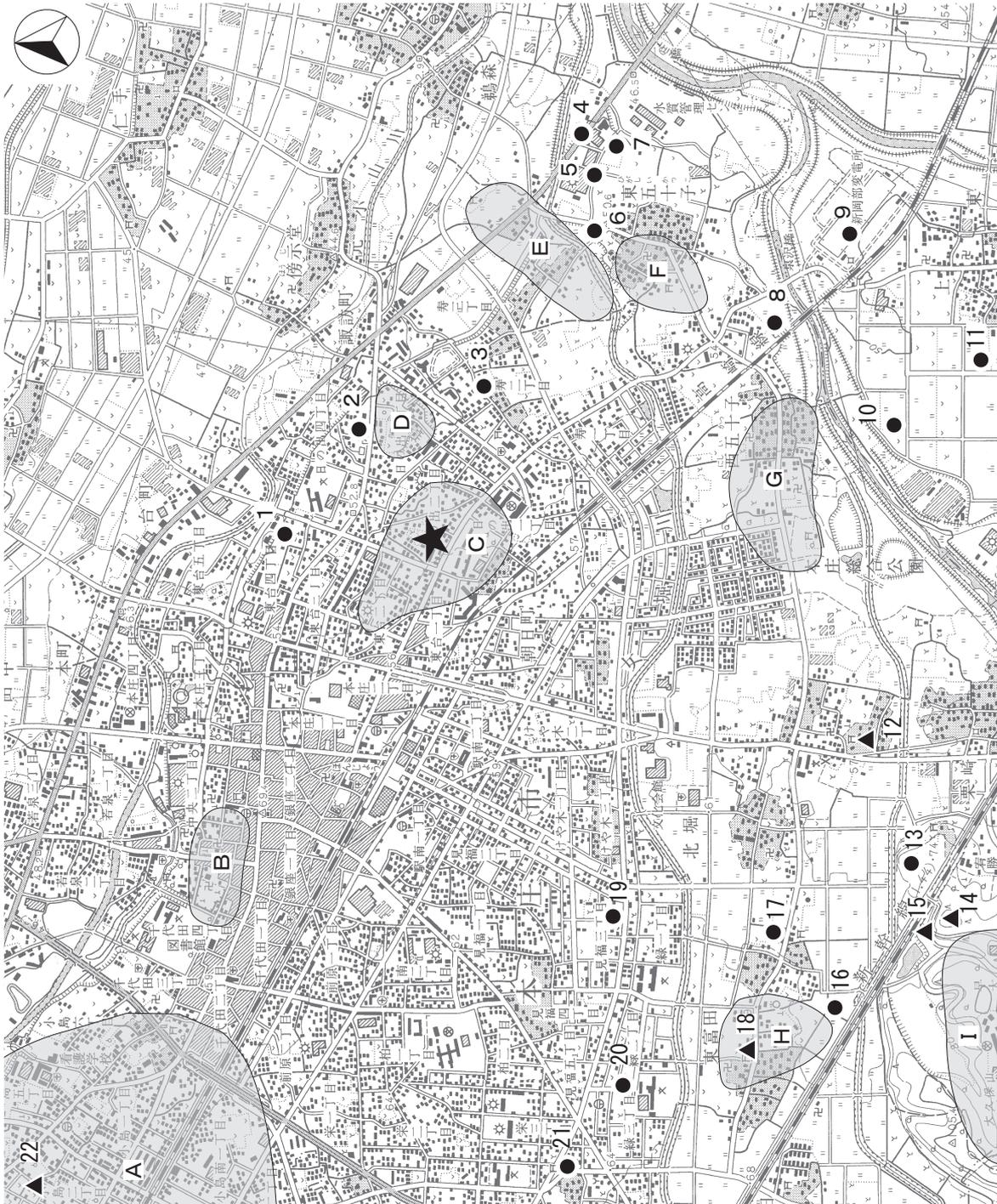


図2 塚合古墳群の位置と周辺の遺跡

- ★ A 本調査区
- B 旭・小島古墳群
- C 北原古墳群
- D 塚合古墳群
- E 御堂坂古墳群
- F 鶴森古墳群
- G 東五十子古墳群
- H 西五十子古墳群
- I 東富田古墳群
- 1 浅見山古墳群
- 2 薬師堂遺跡
- 3 御道坂遺跡
- 4 諏訪新田遺跡
- 5 五十子城跡遺跡
- 6 赤坂埴輪窯跡
- 7 東五十子赤坂遺跡
- 8 東五十子北町中遺跡
- 9 西五十子台遺跡
- 10 六反田遺跡
- 11 大寄遺跡
- 12 西浦北遺跡
- 13 稲荷塚古墳
- 14 有勝寺裏埴輪窯跡
- 15 前山1号墳
- 16 前山2号墳
- 17 七色塚遺跡
- 18 久下東遺跡
- 19 公卿塚古墳
- 20 笠ヶ谷戸遺跡
- 21 雌濠遺跡
- 22 南通り線内遺跡
- ▲ 小島小手長山古墳

▲は古墳を示す。



3 塚合古墳群の概要

塚合古墳群は、本庄台地北東部の東西約 500 m、南北約 600 m の範囲に展開している。周辺には、「塚合」「大塚」など、古墳に由来する地名が見られる。明治時代の初期に作成された地籍図には「ツカ」の記述があるほか、明治 18 年の迅速図に古墳状の表現がある。当時は「百八塚」とも呼ばれていた。これらは、開墾や開発とともに削平されてしまい、調査された古墳は少ない。

開墾時に出土した遺物は、本庄市歴史民俗資料館などに所蔵されている。明治 20 年に飯玉で開墾が行われ、金銅製の柄頭と鏝、銅地金貼りの足金物と責金物、銅製の鞘口、鉄製の鏝付切羽と刀子が出土したと伝えられている。明治 33 年には、東台 2 丁目で畑地から金環と銀環が発見され、現在の東京国立博物館に寄贈されている。

昭和 23 年、本庄東小学校を建設する際にも 6 基の古墳が破壊されている。現在、航空写真において校庭に周溝のソイルマークが確認されている。

昭和 42 年には、4 基の古墳（41 号・42 号・43 号・54 号古墳）が宅地造成の際に調査されている。このうち 3 基（41 号・42 号・43 号古墳）に横穴式石室が残存しており、石材は榛名山の噴火によって形成された角閃石安山岩を用いている。41 号墳・43 号墳は、主体部から鉄鏃・刀子・金環などの副葬品も出土している。全ての古墳から埴輪が出土しているわけではなく、54 号墳には伴わない。

昭和 44 年には、私道工事時に安山岩と埴輪が発見されている。埴輪は、翳形埴輪が 2 点、家形埴輪と靱形埴輪が各 1 点となっている。安山岩が出土したことから、横穴式石室の存在が指摘され、埴輪の年代と併せて 6 世紀後半から末の年代が考えられている。この古墳は諏訪道満古墳と称されているがその所在は不明である。

昭和 60 年に、東小学校の校舎建設に伴い、東小学校 1 号古墳が調査されている。円墳で、周溝覆土より、B 種ヨコハケの円筒埴輪が出土している。

塚合古墳群には、円墳以外に「二子山」古墳という前方後円墳が存在していた。昭和 28 年頃に削平されてしまい、現在はその規模・痕跡を窺うことはできない。しかし、文献や、絵図・写真によって位置は推定される。栗原剛『未定稿 昭和十年起稿 史蹟古蹟写真集成』に記述と写真が掲載されている。これによると、昭和初期に地主による発掘が行われたが、すでに盗掘を受けており、金環・銀環などが残る程度であったという。また、明治 18 年参謀本部陸軍部測量局作成の迅速図には、その位置が記されている。

以上のことから、塚合古墳群は、5 世紀後半に造営を開始し、7 世紀後半の終末期まで、連綿と営まれたと想定され、このなかには、前方後円墳も 1 基含まれている。

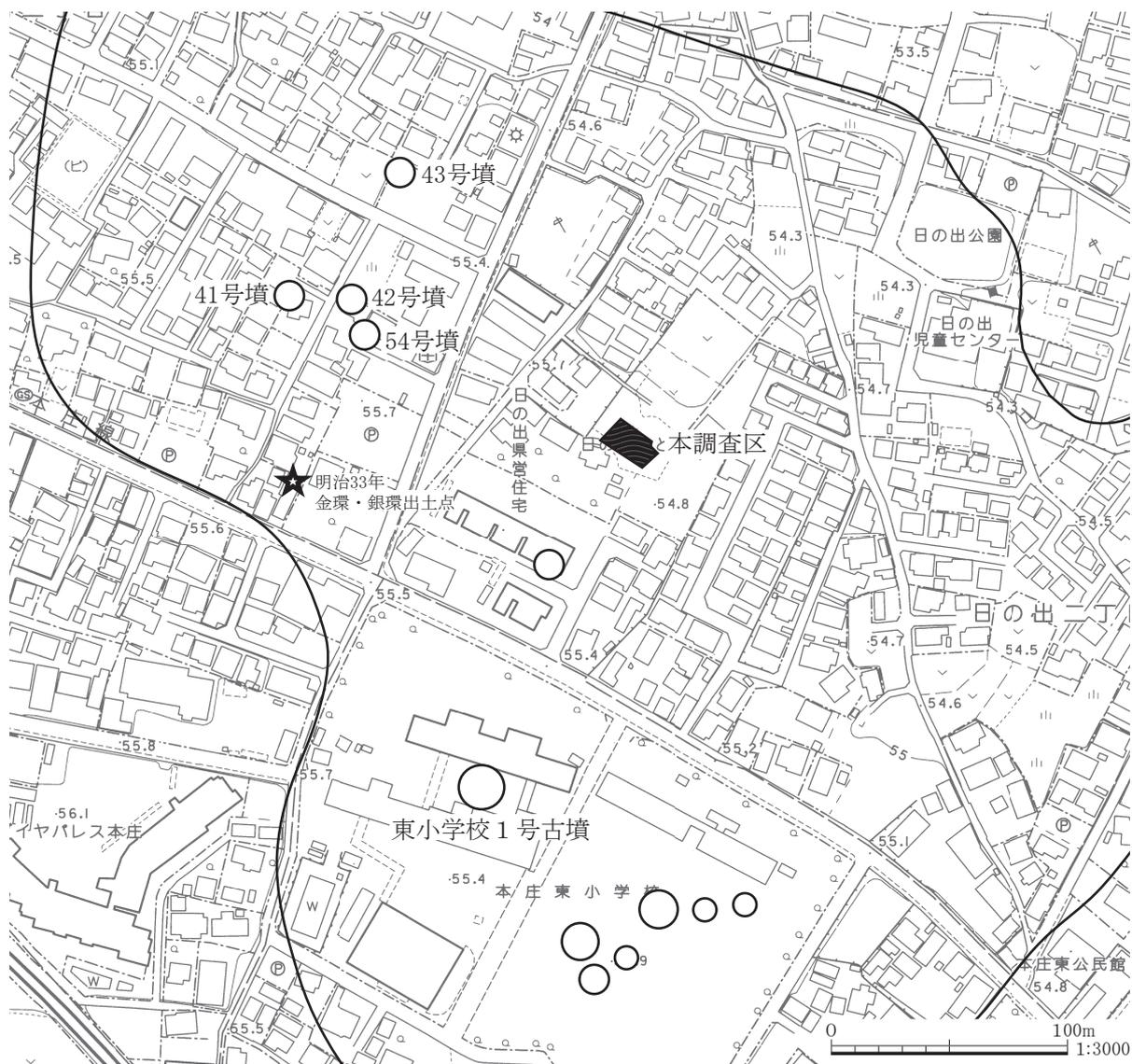


図3 調査地点



図4 明治18年 迅速図

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は教育委員会の試掘結果に基づいて、現地表面から約 70 cm 下の確認面を捉えるべく、重機による表土掘削を行った。表土掘削と並行して遺構確認作業を行ったところ、遺構を大きく破壊する攪乱が検出されたため、調査区全体の遺構確認が終了した段階で、重機を用いて攪乱を掘削した。

遺構は、土層観察用のベルトを設定し、人力で掘り下げを行った。周堀からの遺物は、原位置ではなく、転落したものであると考えられるため、大きな破片以外は一括で取り上げた。

土層断面図は手作業で、平面図にはトータルステーションを用いて作成した。写真撮影は 35 mm 白黒・カラーリバーサルを用い、補助としてデジタルカメラも使用した。

整理作業は、遺物の洗浄後、手作業による注記を行った。遺跡の略号を 53-176-H20 とし、注記の際はこれを用いた。接合にはセメダイン C を、復元にはエポキシ系樹脂を使用した。遺物の実測・トレース・版組は手作業で行い、遺構はデジタルで編集した。整理作業と並行して、原稿の執筆・編集を行った。

2 調査の経過

発掘調査は平成 20 年 7 月 17 日から 31 日にかけて実施した。

7 月 17 日：重機による表土掘削の開始。器材の搬入。調査区内の除草作業。

18 日：表土掘削。雨天のため、正午に作業を中止。

22 日：表土掘削。一部人力にて攪乱を掘り下げた。

23 日：表土掘削の完了。プラン検出。重機を用いて攪乱を掘削する。ST-1・2 の掘り下げを行う。

24 日：引き続き、重機を用いて攪乱を掘削する。ST-2・3 の掘り下げを行う。

25 日：ST-1～3 を掘り下げる。

28 日：ST-1～3 を掘り下げる。ST-1 より礫とともに、馬歯の細片を検出。基準点の移動及び、礫の測量。

29 日：ST-1～3 の土層断面写真撮影及び、図面測量。各遺構の完掘。

30 日：ST-1～3 の土層断面写真撮影及び、平面図測量の完了。基本土層観察用のテストピットの掘り下げ。

31 日：調査区完掘状況の写真撮影。平面図測量。器材の搬出、道具の整備を行い、現地調査を終了した。

現地調査終了後、断続的に遺物の洗浄・注記・接合・写真撮影・実測・トレースや遺構図面の整理・トレース・版組等を行い、平成 21 年 3 月 19 日に報告書の刊行となった。

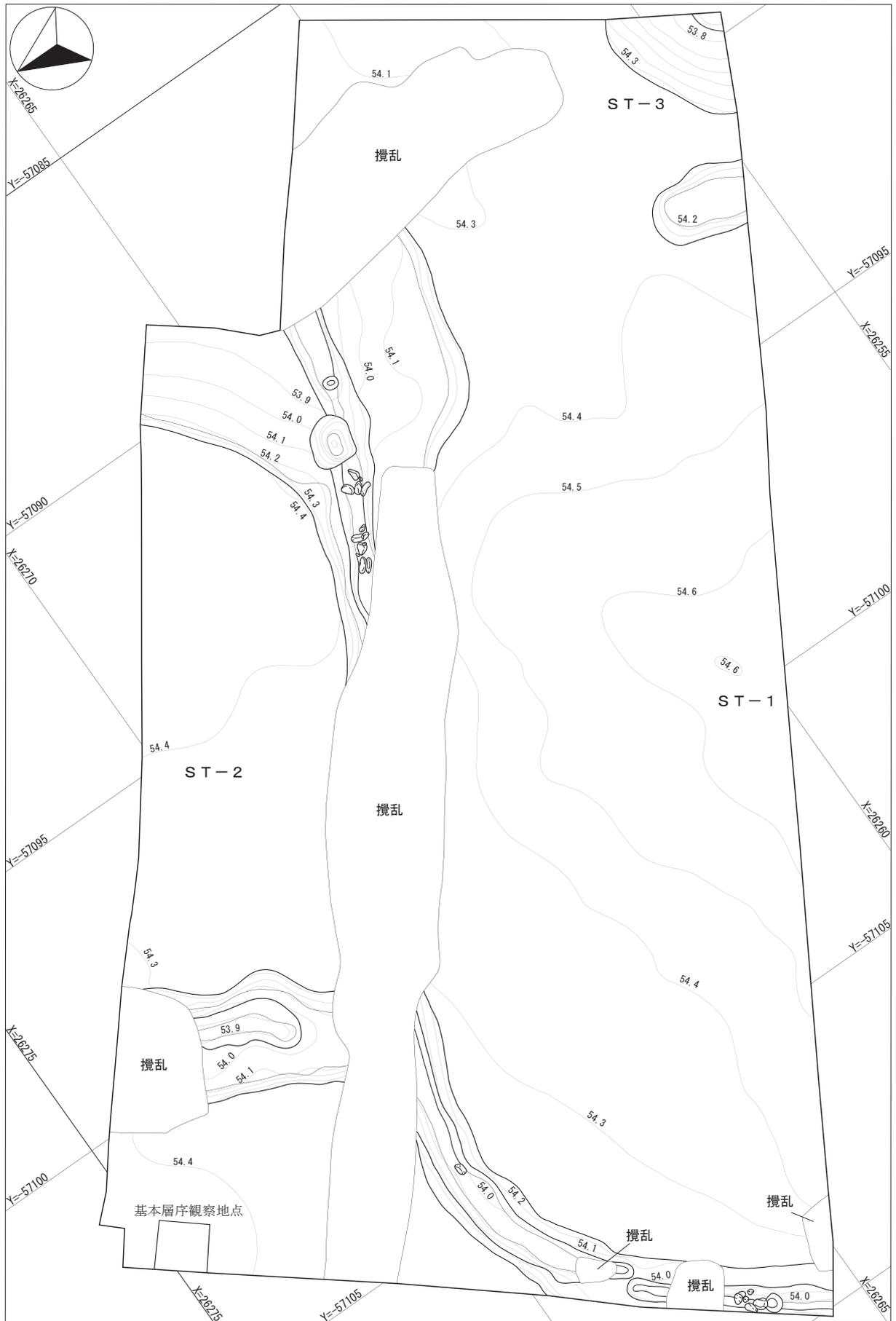


图5 調査区全体図 (S = 1/100)

IV 調査の成果

1 基本層序

調査区西壁において、基本層序観察のためのトレンチを掘削した。I層とした近・現代の整地土層が約80cm堆積しており、この層を取り除くとすぐに地山であるローム層が確認された。ローム層の直上には、砂質の地山土層（II層）が調査区の西半分から検出されている。これは、河川の影響を受けた結果であり、周辺の遺跡においても、同様の地層が確認されている。

I層 近・現代整地層。

II層 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土層。白色粒子を含む。

III層 10YR5/6 黄褐色土層。白色粒子を含む。

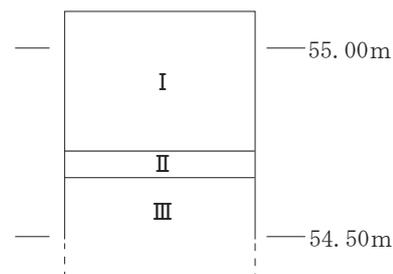


図6 基本層序

2 検出された遺構と遺物

ST-1（遺構：第7図、写真図版1・2 / 遺物：第8図、写真図版4）

検出状況：調査区南に墳丘の一部が残存する古墳である。調査区内において、周堀の南半分を検出した。表土（現代整地層）や攪乱が多く、周堀の残存状況はあまり良くない。主体部及び、その痕跡は確認されなかった。ST-2と近接する部分は、東西に走る攪乱によって破壊されている。

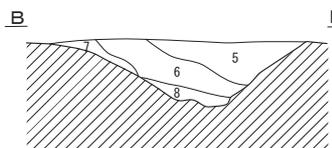
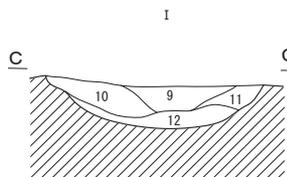
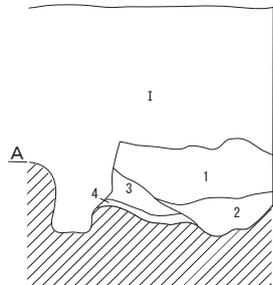
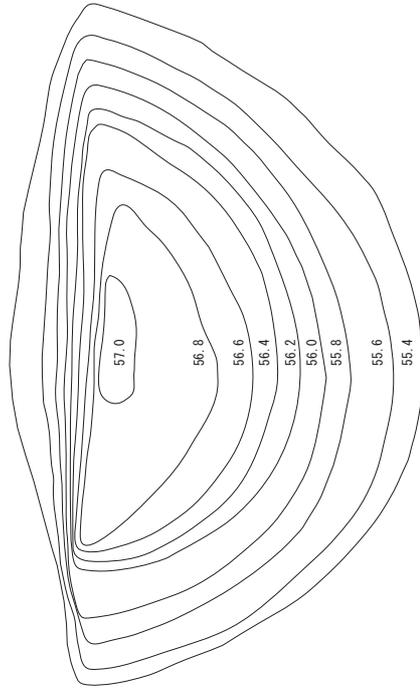
形態と規模：推定墳丘径19mの円墳である。周堀の幅は110cm、深さ30cmを測り、北東部に陸橋を持つ。西側の周堀からは、人頭大の自然石が集中する箇所が見られた。後述する馬歯はここから出土している。

残存する墳丘は高さ約150cmを測る。墳丘裾部の西側は削平されるが、南側・東側は良好に残存している。墳丘表面には石は見られず、葺石はないものと思われる。墳丘断面においても、主体部に用いられたであろう石は観察できなかった。なお、図7の墳丘コンタ図は、概略図である。

覆土の堆積状態：自然堆積を呈する。覆土の中層には、礫が含まれていた。底面付近には、整地の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況：西側の周堀から、人頭大の自然石とともに馬歯が出土した。馬歯は細片であり、1頭分の骨が周堀内にあった可能性は低い。このほかに、周堀覆土より少量の埴輪が出土している。表土掘削中に出土した遺物であるが、形象埴輪の破片も見られた。東側の周堀から遺物は出土しなかった。残存する墳丘部周辺においても、円筒埴輪の破片を表採することができた。

出土遺物：円筒埴輪片、朝顔形円筒埴輪片、形象埴輪片、馬歯片、土師器片が出土した。形象埴輪は、馬形埴輪の脚部だと思われる。土師器は、坏だと思われる。



- 1 10YR3/2 黒褐色土層 ローム粒子中量、焼土微量含む。粘性あり、しまり強。
- 2 10YR3/2 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少量、焼土微量含む。粘性あり、しまり強。
- 3 10YR3/2 黒褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少量、白色粒子微量含む。粘性あり、しまり強。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 ロームブロック主体層。白色粒子微量含む。粘性あり、しまり強。
- 5 10YR3/2 黒褐色土層 ローム粒子・焼土微量含む。粘性強、しまりあり。
- 6 10YR3/2 黒褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少量含む。粘性強、しまりあり。
- 7 10YR3/2 黒褐色土層 ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。粘性強、しまりあり。
- 8 10YR5/6 黄褐色土層 ロームブロック主体層。粘性強、しまりあり。
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 ロームブロック中量、白色粒子微量含む。粘性・しまりあり。
- 10 10YR3/3 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少量、白色粒子微量含む。粘性・しまりあり。
- 11 10YR3/3 暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少量含む。粘性・しまりあり。
- 12 10YR3/2 黒褐色土層 ロームブロック多量含む。粘性強、しまりあり。

図7 ST-1平面および周堀土層断面

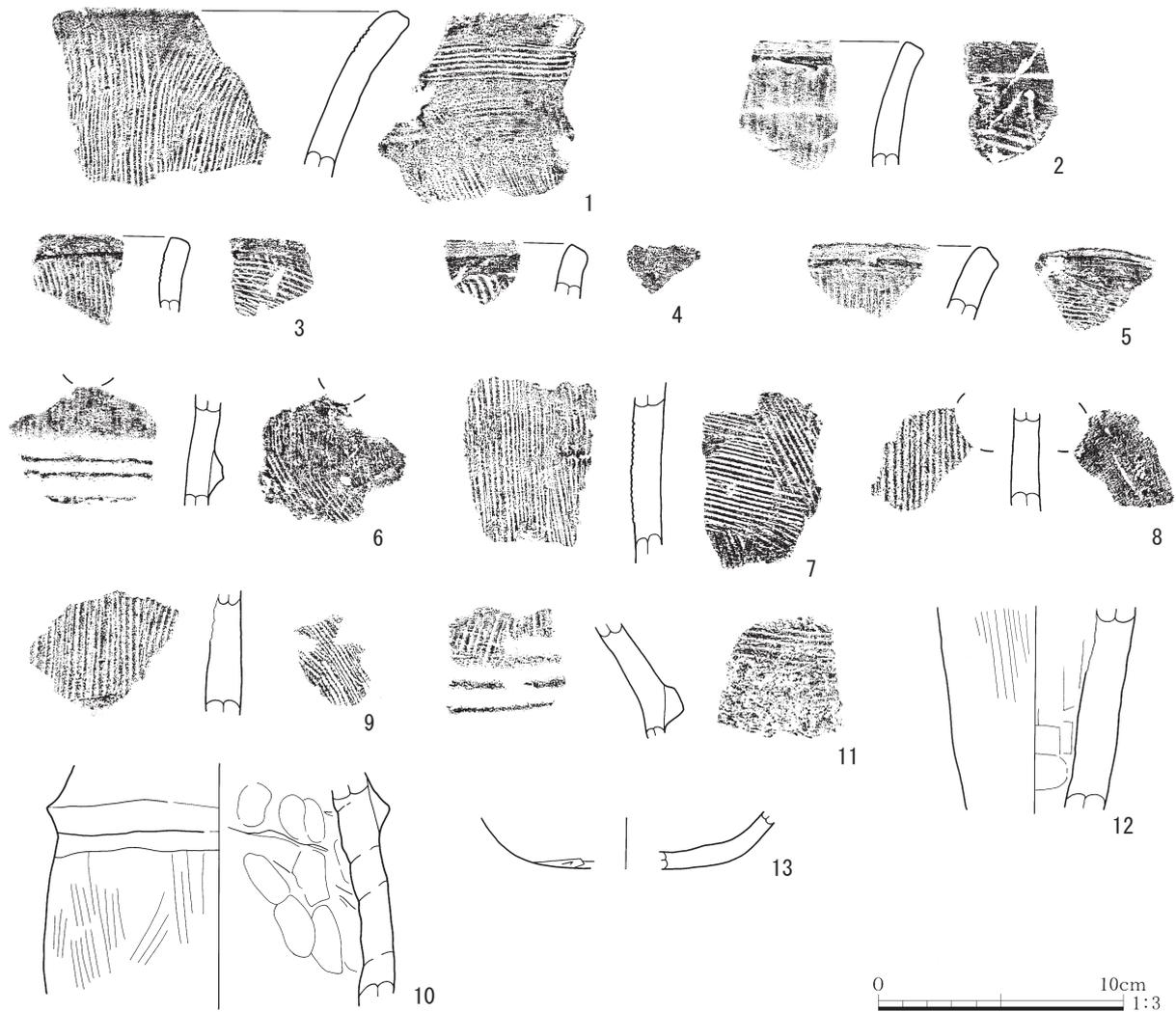


図8 ST-1出土遺物

胎土①角閃石粒・片岩粒・石英粒などの小礫を多く含むキメの粗い胎土 ②片岩を含むキメの細かい胎土

No.	器種	部位 残存率	突帯		透孔		外面調整			内面調整			底部		胎土	焼成	色調
			幅	高さ	形態	径	調整	ハケ本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕				
1	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	9	-	タテハケ→ ヨコハケ	-	-	-	①	良好	橙	
2	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ 摩滅	-	-	ヨコハケ 摩滅	-	-	-	②	良好	橙	
3	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	10	-	ヨコハケ	-	-	-	①	良好	明赤褐	
4	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	6	-	ヨコナデ	-	-	-	①	良好	明赤褐	
5	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	9	-	ヨコナデ→ ヨコハケ	-	-	-	①	良好	橙	
6	円筒	胴部 破片	2.2	0.6	円	-	タテハケ	7	-	タテ~ ナナメハケ	-	-	-	①	良好	橙	
7	円筒	胴部 破片	-	-	-	-	タテハケ	11	-	ナナメハケ →ヨコハケ	-	-	-	①	良好	にぶい赤褐	
8	円筒	胴部 破片	-	-	円	-	タテハケ	7	-	タテ~ ナナメハケ	-	-	-	①	良好	にぶい橙	
9	円筒	胴部 破片	-	-	-	-	タテハケ	7	-	ナナメハケ	-	-	-	①	良好	橙	
10	朝顔	肩部 破片	2.5	0.8	-	-	タテハケ	7	-	ナデ 指頭圧痕	-	-	-	②	良好	明赤褐	
11	朝顔	肩部 破片	1.7	0.7	-	-	タテハケ	7	-	ヨコハケ	-	-	-	①	良好	明赤褐	
12	形象	馬脚か 破片	-	-	-	-	タテハケ	8	-	ヨコナデ→ タテハケ	-	-	-	①	良好	橙	

表1 ST-1出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
13	土師器 坏	口径— 底径(8.0) 器高—	体部は緩やかに立ち上がる。	外面ヨコナデ。底部ヨコケズリ。 内面ヨコナデ。	角閃石・石英 にぶい橙色	

表2 ST-1 出土遺物観察表(2)

ST-2 (遺構: 第9図、写真図版3/遺物: 第10図、写真図版5)

検出状況: 調査区北側に検出された古墳である。主体部及び、その痕跡は検出されなかった。ST-1と近接する部分と調査区北壁と接する部分は攪乱によって破壊されている。

形態と規模: 推定墳丘径 11.5 m の円墳である。周堀の幅は 100 ~ 240 cm、深さ 30 cm を測る。平面形は歪みがあり、整円は描かない。南側・西側の周堀は攪乱に破壊されている。東側の周堀は、なだらかな掘り込みで幅も広く、不整形な形状であった。また、底面付近のみ一段下がる構造を呈し、土坑状に深くなる箇所もあった。ここからは、人頭大の自然石が検出され、埴輪片も出土している。

覆土の堆積状態: 自然堆積を呈するが、底面直上には、ロームブロックが主体となる整地層が確認できた。

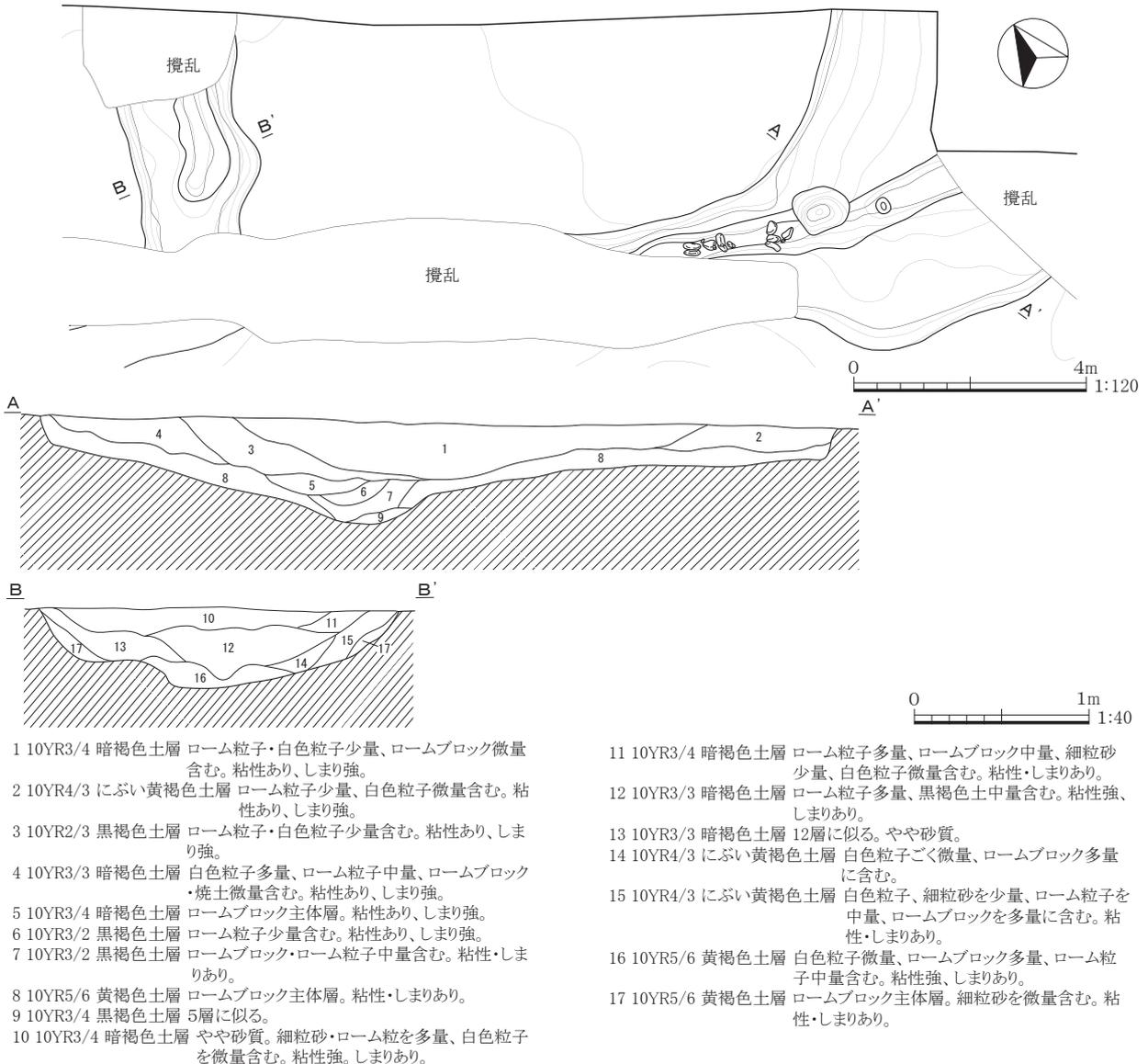


図9 ST-2 平面および周堀土層断面

また、前述した溝状の落ち込みの上層には、ロームブロックを含む層が堆積しており、ある程度自然埋没した段階で、墳丘の崩落等の要因から、この層が形成されたものと思われる。

遺物出土状況：遺物は、周堀の南東を中心に、覆土の上層から下層にかけてまばらに見られた。西側の周堀からは遺物が出土しなかった。

出土遺物：円筒埴輪片が出土しているが、小片がほとんどであった。

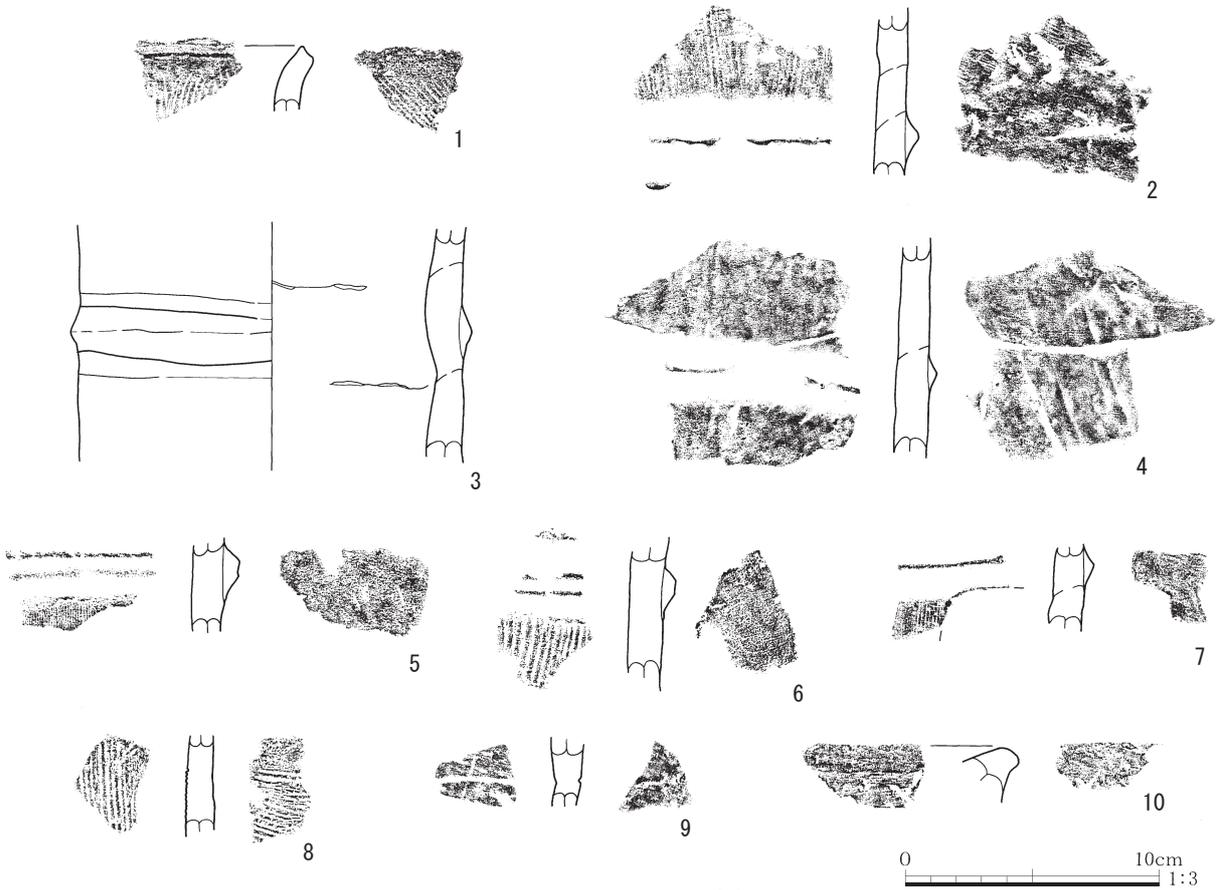


図 10 ST-2 出土遺物

胎土①角閃石粒・片岩粒・石英粒などの小礫を多く含むキメの粗い胎土 ②片岩を含むキメの細かい胎土

No.	器種	部位 残存率	突帯		透孔		外面調整			内面調整			底部		胎土	焼成	色調
			幅	高さ	形態	径	調整	ハケ本数 (\div 2 cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕				
1	円筒	口縁部 破片	—	—	—	—	タテハケ	7	—	ナナメハケ	—	—	—	①	良好	橙	
2	円筒	胴部 破片	2.3	0.5	—	—	タテハケ 摩滅	9	—	指頭圧痕→ ヨコハケ	—	—	—	②	良好	橙	
3	円筒	胴部 破片	2.2	0.5	—	—	タテハケ 摩滅	—	—	タテハケ 摩滅	—	—	—	②	良好	橙	
4	円筒	胴部 破片	2.1	0.3	—	—	ハケ? 摩滅	—	—	ハケ? 摩滅	—	—	—	②	良好	明黄褐	
5	円筒	胴部 破片	2.4	0.7	—	—	タテハケ	18	—	ヨコナデ	—	—	—	①	良好	橙	
6	円筒	胴部 破片	2.7	0.5	—	—	タテハケ	7	—	ヨコナデ	—	—	—	①	良好	橙	
7	円筒	胴部 破片	2.1	0.5	円?	—	タテハケ 摩滅	—	—	ナデ 指頭圧痕	—	—	—	②	良好	橙	
8	円筒	胴部 破片	—	—	—	—	タテハケ	7	—	ヨコハケ	—	—	—	①	良好	橙	
9	円筒	胴部 破片	—	—	—	—	線刻 ×	—	—	指頭圧痕	—	—	—	②	良好	橙	
10	円筒	口縁部 破片	—	—	—	—	ヨコナデ	—	—	ヨコナデ	—	—	—	②	良好	明赤褐	

表 3 ST-2 出土遺物観察表

ST-3（遺構：第11図、写真図版3/遺物：第12図、写真図版5）

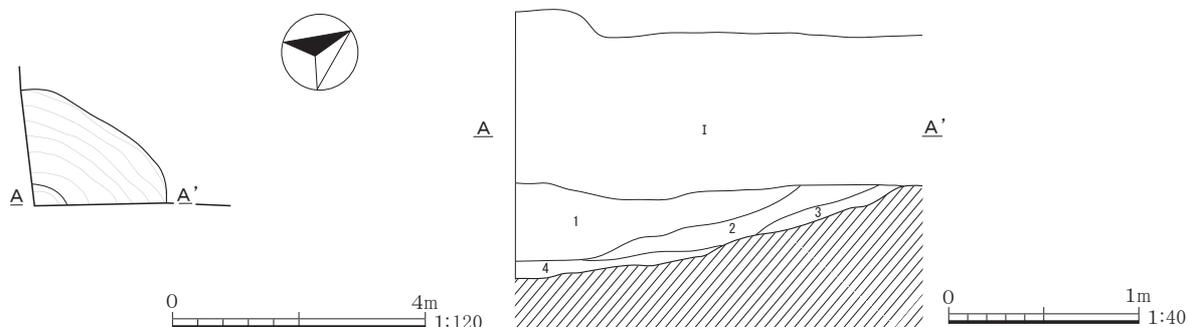
検出状況：調査区南東隅に周堀の一部を確認した古墳である。当初ST-1として掘削を開始したものの、調査区外へと延びる周堀であることがわかり、ST-3とした。

形態と規模：墳丘側の立ち上がりは調査区外となっているため、周堀の幅は不明である。推定径は約15m、深さは35cmであった。

覆土の堆積状態：自然堆積だと思われる。底面直上にロームブロックが主体となる整地層が確認できた。

遺物出土状況：覆土上層から少量出土している。また、上層からは、角閃石安山岩が出土したが、加工痕などはなかった。しかし、周辺の古墳の主体部に使用されている石材は、角閃石安山岩がほとんどであることから、主体部に使用された可能性も考えられる。

出土遺物：遺物は小片ばかりであったが、すべて円筒埴輪の破片だと思われる。底部の破片を1点、図示した。



- 1 10YR3/3 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子少量含む。粘性あり、しまり強。
- 2 10YR3/3 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒子微量含む。粘性あり、しまり強。
- 3 10YR3/4 暗褐色土層 ローム粒子少量、ロームブロック・焼土微量含む。粘性あり、しまり強。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 ロームブロック主体層。粘性強、しまりあり。

図11 ST-3平面および周堀土層断面

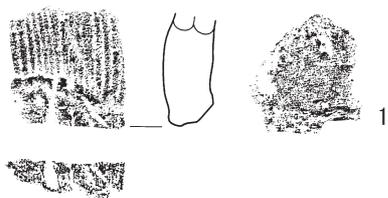


図12 ST-3出土遺物

胎土①角閃石粒・片岩粒・石英粒などの小礫を多く含むキメの粗い胎土 ②片岩を含むキメの細かい胎土

No.	器種	部位 残存率	突帯		透孔		外面調整			内面調整		底部		胎土	焼成	色調
			幅	高さ	形態	径	調整	ハケ本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕			
1	円筒	底部 破片	-	-	-	-	タテハケ	8	-	ヨコナデ	-	-	棒	①	良好	にぶい黄橙

表4 ST-3出土遺物観察表

3 遺構外出土遺物

遺構外からも埴輪が出土している。ここでは、9点を図示した。図13の9は形象埴輪片だと思われるが、器種は不明である。

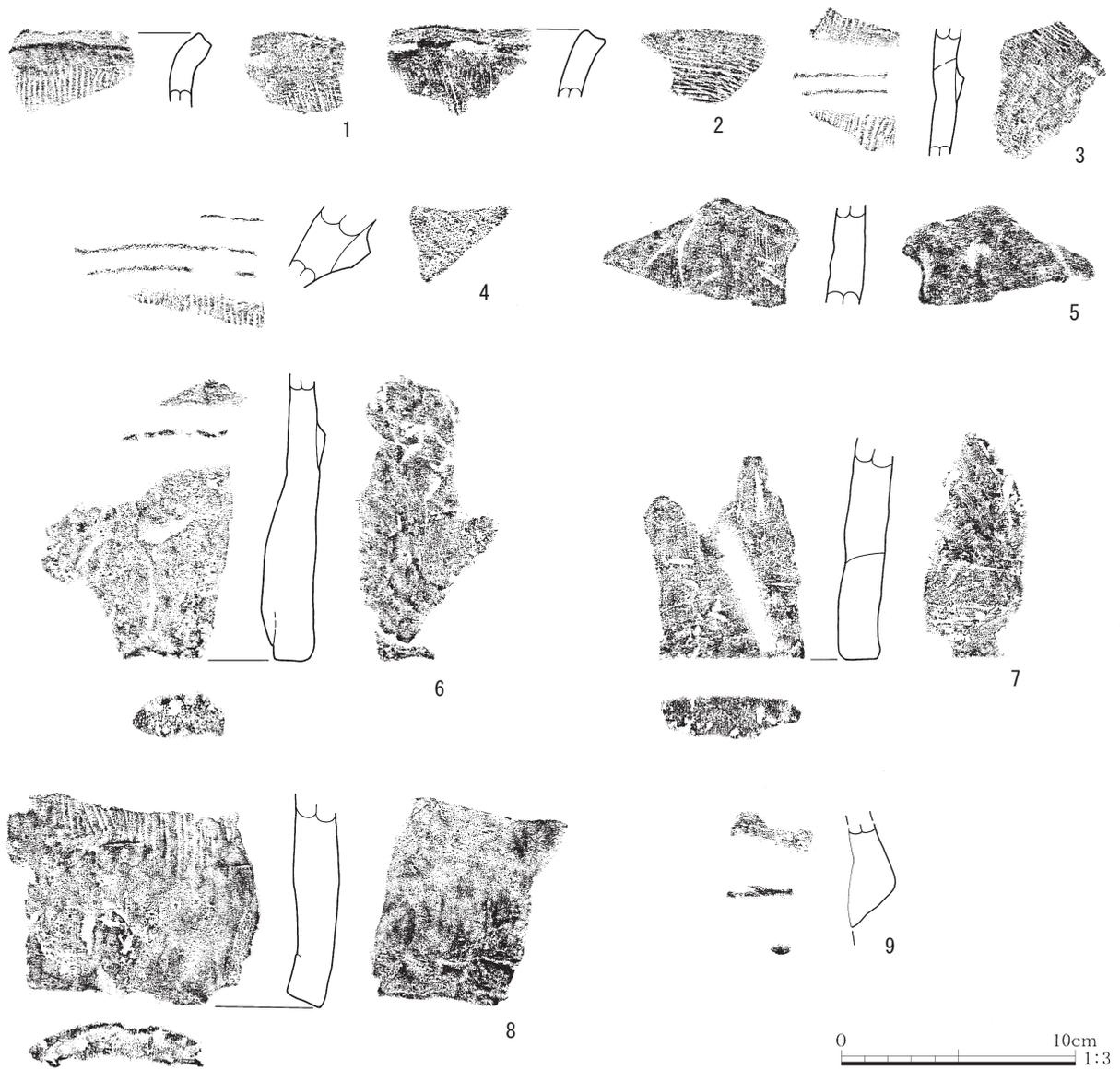


図 13 遺構外出土遺物

胎土①角閃石粒・片岩粒・石英粒などの小礫を多く含むキメの粗い胎土 ②片岩を含むキメの細かい胎土

No.	器種	部位 残存率	突帯		透孔		外面調整			内面調整			底部		胎土	焼成	色調
			幅	高さ	形態	径	調整	ハケ本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕				
1	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	8	-	-	-	-	-	①	良好	橙	
2	円筒	口縁部 破片	-	-	-	-	タテハケ	8	-	ヨコハケ	-	-	-	①	良好	橙	
3	円筒	胴部 破片	2.6	0.4	-	-	タテハケ	9	-	指頭圧痕 →ヨコハケ	-	-	-	①	良好	明赤褐	
4	朝顔	口縁部 破片	3.0	0.9	-	-	タテハケ	8	-	ヨコナデ	-	-	-	①	良好	橙	
5	円筒	胴部 破片	-	-	円	-	タテハケ 摩滅	-	-	指頭圧痕 →ヨコハケ	-	-	-	②	良好	にぶい黄橙	
6	円筒	底部 破片	-	-	-	-	摩滅	-	-	タテナデ	-	-	-	②	良好	橙	
7	円筒	底部 破片	-	-	-	-	摩滅	-	-	ナデ 指頭圧痕 タテナデ	-	-	-	②	良好	橙	
8	円筒	底部 破片	-	-	-	-	タテハケ	7	ナデ	指頭圧痕	-	-	-	②	良好	橙	
9	形象	不明 破片	-	-	-	-	ナデ	-	-	剥離	-	-	-	②	良好	橙	

表 5 遺構外出土遺物観察表

V まとめ

今回の調査では、古墳の周堀を3基検出した。全容のわかるものではなく、ST-1・2が全体の1/2、ST-3にいたっては、ごく一部を検出したに過ぎない。このように限られた範囲ではあるが、今回の調査のまとめと塚合古墳群の復元を行ってみたい。

1 周堀について

3基の古墳周堀からは、古墳築造の際の痕跡を窺うことができた。ST-1では、西側の周堀に、底面に段差を持つ部分があり、作業単位として捉えられる。また、ST-2・3の周堀底面には、ロームブロックを含むやや硬化した層が認められ、周堀を掘り下げた後に整地を行っているものと考えられる。

ST-1・2の周堀はかなり近接している。しかし、周堀が接するであろう部分は東西方向に走る攪乱によって破壊されているため、これらの先後関係は不明である。しかし、ST-1は、東側に陸橋を持っている。これは、先行して構築されたST-2を避けるために陸橋を設けたと考えられ、ST-2→ST-1の順が推測される。ただし、西五十子古墳群では周堀が重複する例があり、ST-1・2が重複していた可能性もある。

2 埴輪について

各古墳からは、円筒埴輪や形象埴輪の破片が出土している。完存する埴輪はなく、いずれも小片であった。ST-1・2とも円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が見られ、ST-1には形象埴輪が1点出土している。円筒埴輪は、突帯が台形のものや三角形のものが出土している。円筒埴輪の特徴からして、ST-1・2には大きな時期差は認められず、6世紀代と考えられる。なお、ST-3からは、破片が3点のみ出土したにとどまり、時期は不明である。

3 塚合古墳群の復元

塚合古墳群は、II-3で述べたように開発等によって姿を消してしまった古墳群である。しかし、図4の明治18年参謀本部陸軍部測量局作成の迅速図には、本遺跡周辺に数基の古墳が図示されており、ある程度、古墳群を推定復元することができる。図14は現在の地図と迅速図を合成したものである。

①がST-1、②がST-3である可能性が考えられるが、正確には整合していない。ST-2および昭和44年調査の古墳や東小学校内の古墳に該当するものはなかった。なお、塚合古墳群に存在していた、前方後円墳である二子山古墳は東小学校の東側に位置していたと想定される。

迅速図では、12基の古墳が記されている。この他に、調査・確認された古墳を足すと23基を数える。今回の調査においても、約225㎡という狭小な調査区から、近接して3基の古墳が検出されたことも鑑みると、塚合古墳群の密集度の高さを窺わせる。今回の調査は、塚合古墳群の一端を垣間見たに過

がないが、本報告書が塚合古墳群の詳細説明の一助となれば幸いである。



図 14 塚合古墳群の復元

【参考文献】

- 太田博之 2005『旭・小島遺跡群—上前原・堂場・内出前・永不地区—』本庄市教育委員会
2007『西五十子古墳群』本庄市教育委員会
佐藤好司 1988「本庄市内出土の埴輪 東小学校1号古墳出土の埴輪」『本庄市歴史民俗資料館紀要』第2号 本庄市歴史民俗資料館
塩野 博 2004「塚合古墳群」『埼玉の古墳 児玉』さきたま出版会
菅谷浩之ほか 1980『長沖古墳群』児玉郡児玉町教育委員会
菅谷浩之 1976「塚合古墳群」『本庄市史 資料編』本庄市
長谷川勇 1986「市内の古墳分布」『本庄市史 通史編』本庄市
松本 完 2002『市内遺跡発掘調査報告書—御堂坂第1号墳の調査—』本庄市教育委員会

写 真 图 版



ST-1 全景 北から



ST-1 全景 東から



ST-1 墳丘残存状況

写真図版 2



ST-1 土層断面



ST-1 礫出土状況



ST-1 馬歯出土状況



ST-2 全景 西から

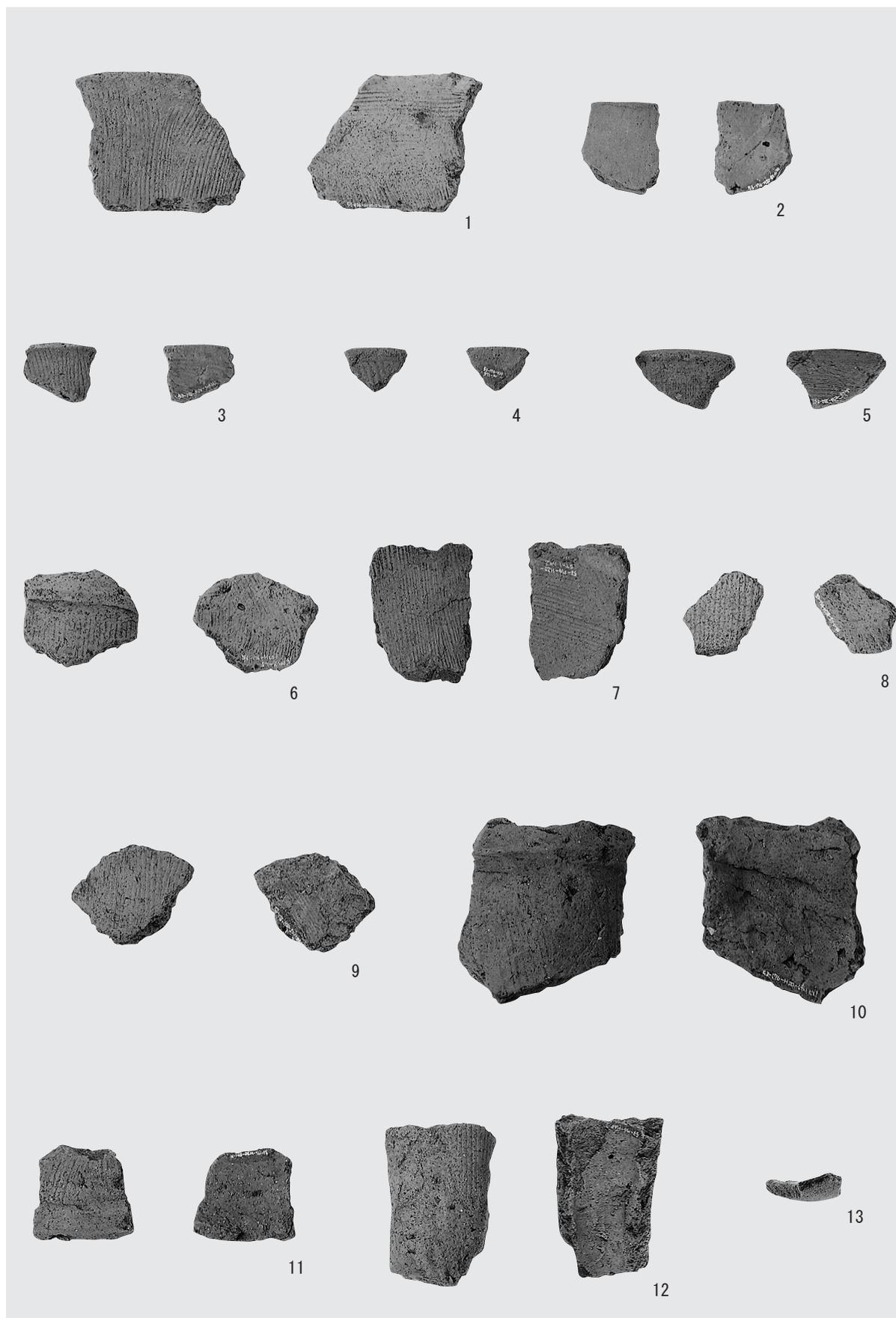


ST-2 土層断面

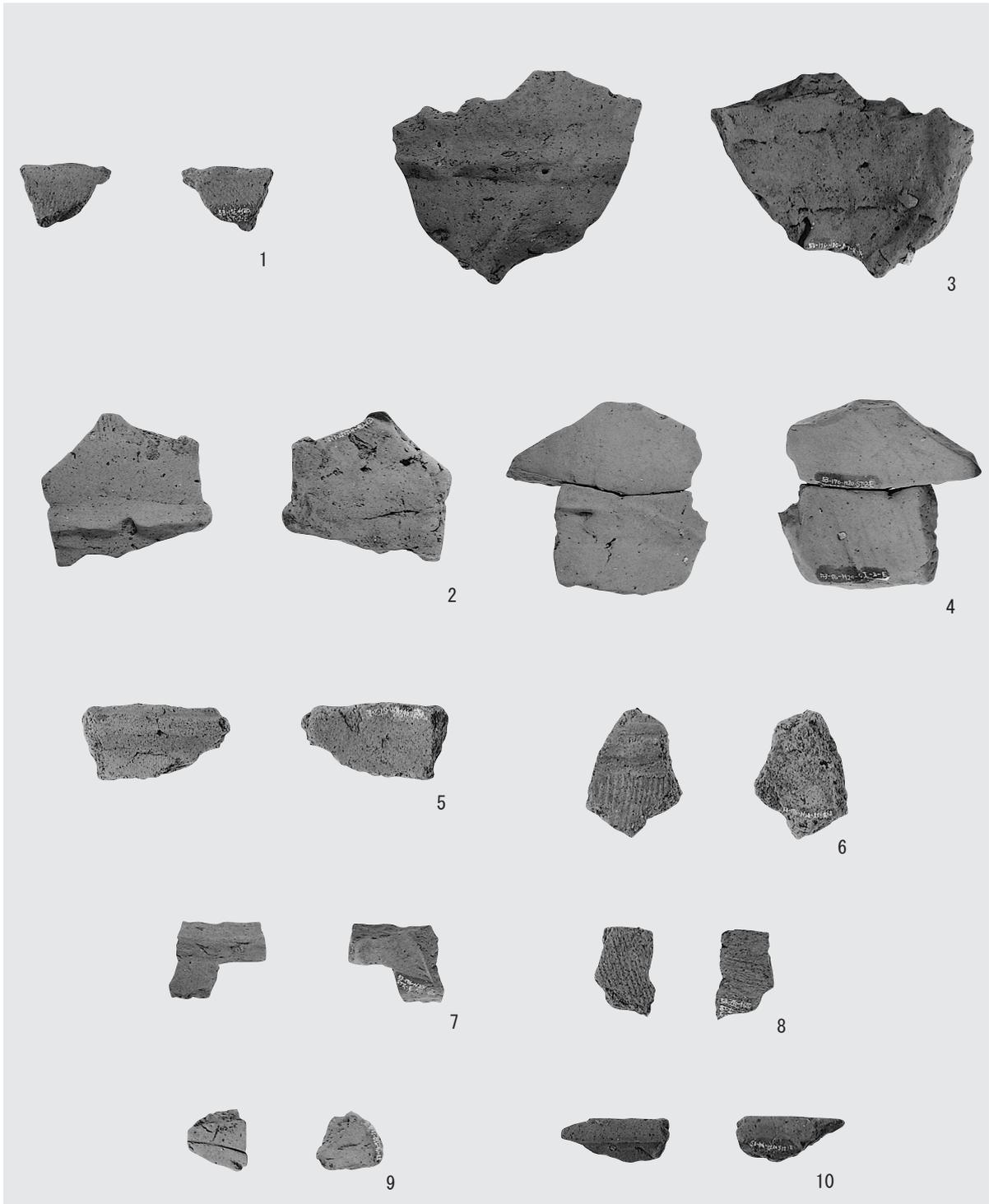


ST-3 全景

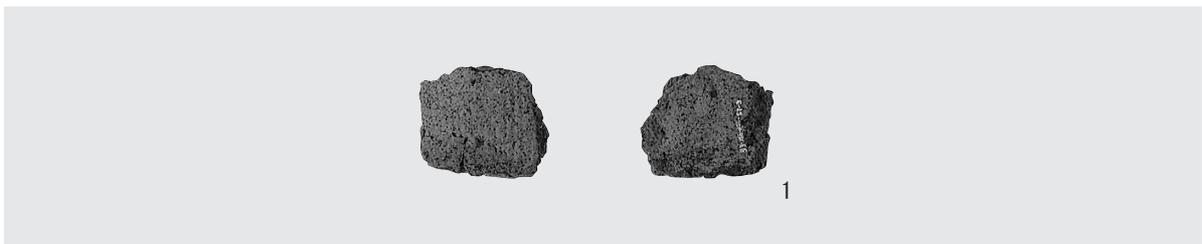
写真図版 4



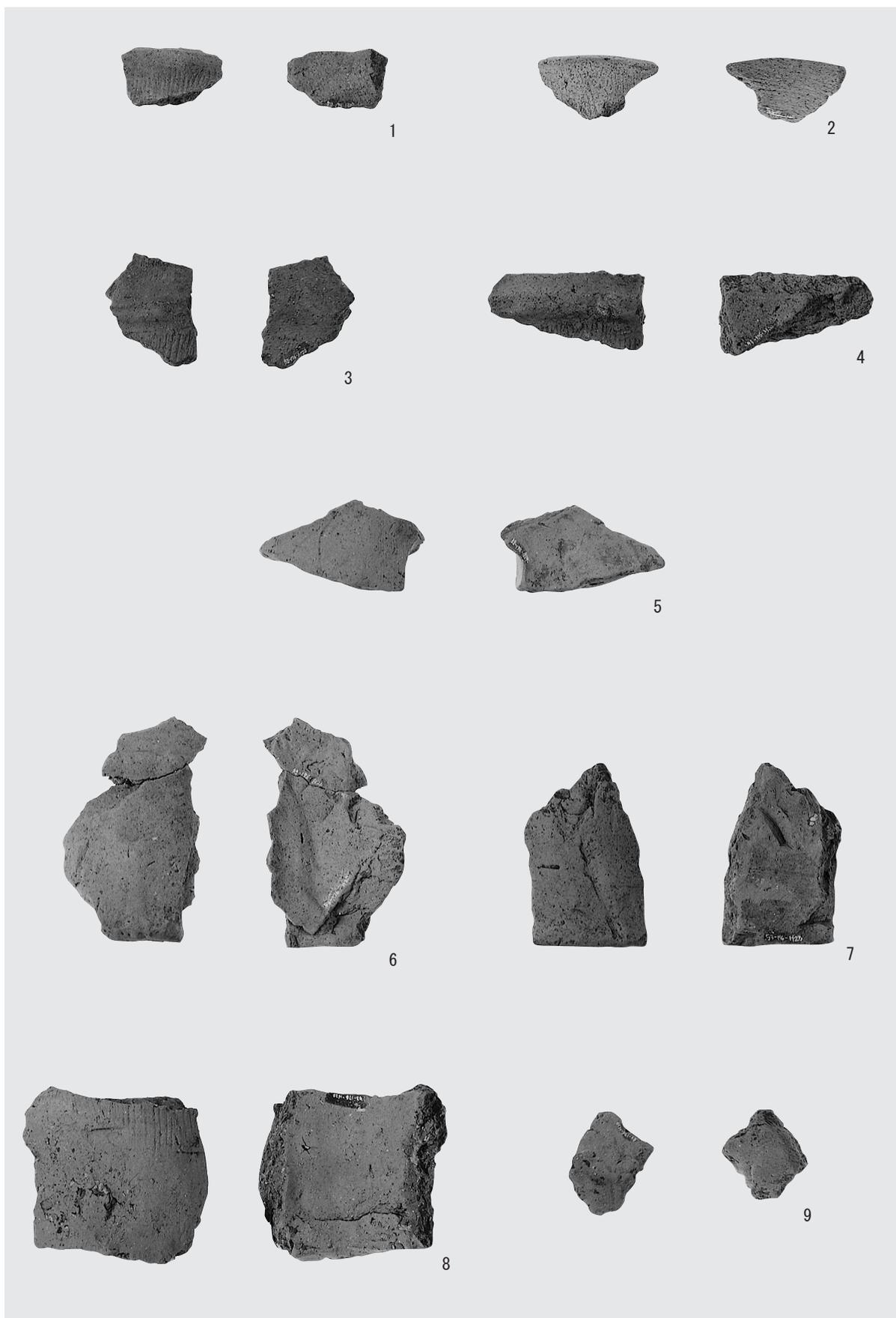
ST-1 出土遺物



ST-2 出土遺物



ST-3 出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つかあいこふんぐんに
書名	塚合古墳群Ⅱ
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	宮本久子
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市3丁目5番3号 ☎0495-25-1185
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月19日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
塚合古墳群	埼玉県本庄市日の出二丁目3490-1	53	176	36° 13' 55	137° 52' 04	20080717 ～ 20080731	225 m ²	共同住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚合古墳群	古墳	古墳時代	古墳址 3基	埴輪、土師器、馬骨	

本庄市埋蔵文化財調査報告書 第18集

塚合古墳群Ⅱ

共同住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成21年3月13日 印刷

平成21年3月19日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社